

二〇一五年二月二三日

とびきりの笑顔でポーズ七五三
潜望鏡めく枯蓮に見られたる
目印に水車の廻る新蕎麦屋
母の忌の菩提寺の庭小鳥来る
落ち葉積む叢林鳥語姦しく
神留守の藪の騒がしき鳥語かな
夕時雨ほつほつ灯る街明かり
芋掘りに泥ヒゲつけて児ら夢中

二〇一五年二月二二日

夕暮れのベンチ木の実の忘れ物
せせらぎに日の斑の躍る紅葉晴
裏庭の一隅石路の花明かり
落葉道踏みゆく吾も一詩人
かさこそと心地よき音落ち葉踏む
冬神輿気合いもろとも滝壺へ

二〇一五年二月二一日

人頭石発止とうちて椿落つ
石畳覆いつくして黄落す
音もなく紅葉かつ散る奥の院
天守へと黄を尽くしたる大銀杏
竹の影現れては失せる障子かな
古刹への裏参道の石路明かり

二〇一五年二月一〇日

笑い声絶へぬ媼ら日向ぼこ
吟行に膝掛け持ちて出かけけり
土付きの甘藷並びし無人駅
神留守の斎庭に伏せし湯立釜

こすもす

なつき

あさこ

ひかり

ひかり

ぼんこ

三刀

智恵子

智恵子

智恵子

宏虎

智恵子

菜々

はく子

治男

明日香

さつき

よし女

はく子

うつき

宏虎

こすもす

よし女

さつき

菜々

二〇一五年二月九日

しぐるるや昼なほ暗き嵯峨の径
梢洩る日の目潰しや冬桜
堰堤の水の細りて冬に入る
落葉巻きあげてバイクの郵便夫

二〇一五年二月八日

稲架襖ハの字くの字の棚田かな
からからと吾を追ひ越す落葉かな
紅葉晴団地ひろばに蚤の市
対岸の嶺々模糊として霧の湖
と見る間に峡の一村霧隠れ
里山の軒といふ軒吊るし柿
小流れの汀をつづる草紅葉
琥珀色までひといきと大根煮る
秋天へ紙飛行機の機嫌良し
登高や九十九島の展けたる

二〇一五年二月七日

黄落の道こつこつとハイヒール
リュック置き思ひ思ひに花野行く
ふつふつと柚子味噌部屋に香り立つ
出航の汽笛一声秋高し
石文を囲みて石路の花明かり
まつすぐに黄落浄土けやき道
七五三笑へば飴が飛び出せり
落人の越えしこの淵秋深む

宏虎

なつき

ひかり

菜々

さつき

せいじ

菜々

せいじ

有香

花茗荷

菜々

ひかり

智恵子

さつき

三刀

さつき

智恵子

さつき

泰山

菜々

なつき

治男

毎日句会みのる選・二〇一五年二月一五日